

## 明治神宮の森

都市研究センター研究理事

山口 智

### はじめに

神社や寺院の境内の樹木や林は、都市部においては公園と並んで身近で貴重なもうひとつの緑の空間となっている。特に、神社の森は昔から「鎮守の森」といわれ、人々の生活を鎮め、守ってくれる聖なるものとして崇められ、親しまれてきた。なかでも明治神宮の森は、東京都区部のほぼ中央にあり、「東京の鎮守の森」と呼ぶ人も多い。また、明治神宮は、毎年、初詣には約 300 万人もの参拝者があり、日本一となっている。

明治神宮の森は、面積 70 ヘクタールで、東京都区内における貴重な緑の空間となっており、都市景観に美しさを与えるとともに、都市防災の機能や気象を緩和する機能を果たしている。先の戦争時には、明治神宮も空襲を受け社殿は焼失したが、森は焼夷弾にもほとんど延焼しなかったといわれる。また、境内の気温は市街地より 1～2 度低く、夏でもすがすがしく、さわやかな感じがする。明治神宮には、参拝に訪れる人ばかりでなく、緑の中でのくつろぎ、憩いを求めて訪れる人も多い。また、この森は、野鳥や昆虫など多くの生き物のすみかともなっている。

このように、大都会の中の貴重な森となっている明治神宮の森であるが、明治

神宮の造営前から今のような森があったわけではなく、世界的に見ても人工の森の傑作であるといわれる。人工の森というと、明治神宮の森は昔からの武蔵野の自然の森を保存して今日に至ったものと思っていて、意外に思う方もおられるかもしれない。本稿では、現在のような自然の森と見間違えばかりの明治神宮の森がどのようにして生まれたのかをみてみることにする。

(参考)

都区内の主要な公園・緑地空間

名称	所在地	面積 ha
皇居外苑	千代田区	95.8
葛西臨海公園	江戸川区	79.6
水元公園	葛飾区	75.2
明治神宮内苑	渋谷区	70.2
光が丘公園	練馬区	60.8
新宿御苑	新宿区	58.3
代々木公園	渋谷区	54.1
上野恩賜公園	台東区	53.4
舎人公園	足立区	51.4
明治神宮外苑	新宿区・港区	27.3
皇居東御苑	千代田区	20.7
日比谷公園	千代田区	16.2

資料：東京都「東京都の公園緑地マップ 2002」

## 明治神宮の造営決定

明治神宮の森の造営は、明治 45 年（西暦 1912 年）の明治天皇の崩御に遡る。崩御後、その陵墓は宮内省によって京都の伏見桃山と決定された。当時の東京市長をはじめとする東京の有力者や市民は明治天皇の陵墓を「ぜひ東京に」と強く要望していたが、伏見桃山に決定されてからは、明治天皇の御神霊をお祀りし御聖徳を偲ぶ神宮を東京に創建するよう政府に新たに要望した。その後、神宮の創建は東京市民の熱望にとどまらず、全国的な気運となり、帝国議会の貴衆両院は、明治神宮建設の建議を議決した。

これを受けて、政府は、大正 2 年（1913 年）明治神宮創建を決定し、神社奉祀調査会を発足させた。

また、大正 3 年に、明治天皇の皇后であらせられた昭憲皇太后も崩御され、併せてお祀りすることとなった。

神宮建設の候補地については、東京府内に限らず全国各地から約 40 箇所へのぼる請願、陳情がなされたとのことである。東京府内では、代々木御料地のほかに陸軍青山連兵場跡地、陸軍戸山学校敷地、白金火薬庫跡地、青梅町の御嶽山など、東京府外では、静岡県の富士山麓、茨城県の筑波山、国見山、埼玉県の宝登山、城峯山、朝日山、神奈川県箱根離宮付近、千葉県の国府台などであった。

調査会による調査の結果、この中で、すでに御料地で、明治天皇御自ら皇后の散策のための庭園の改修について指図されるなど皇室との縁も深かった代々木の地が鎮座地に選ばれた。なお、この庭園は、

現在、明治神宮御苑と呼ばれ、公開されている。

## 代々木の地

代々木の地は、江戸時代には彦根藩主井伊家の下屋敷があったが、明治 17 年に御料地となったものである。この代々木御料地は、ほかの候補地に比べれば樹木数は多かったが、敷地の大半は畑地や茶畑、草原、沼地で、林地は全体の 5 分の 1 程度しかなかった。

なお、「代々木」という地名は、この地にあった一本のモミの木に由来するとのことである。この地は、元は不毛の原野であったとのことであるが、代々、一本のモミの木が立っていて、幕末にあった木は、江戸の町の目印になるほどの大木であったという。そして、この代々のモミの木から「代々木」という地名がついたといわれている。

## 造営局の発足

明治神宮の造営計画と施工は、神社奉祀調査会の後を受けて、大正 4 年（1915 年）に内務省の外局として設置された明治神宮造営局が行った。造営計画の検討は、当時神社建築の第一人者といわれた伊藤忠太工学博士、関野貞工学博士、樹林・樹木の専門家である川瀬善太郎林学博士、本多静六林学博士、本郷高德博士をはじめ、当代一流の学者、専門家によって行われた。なお、本多博士は、日比谷公園（明治 36 年完成）の設計者である。

林苑設計の基本方針は、日本の神社の

伝統に沿い、「神苑にふさわしく世間の騒々しさがまったく感じられない荘厳な風致をつくる」ことにあり、それは、常に大木が鬱蒼とし、天然更新により、永久に繁茂する森を育て、森の自然の力によって神宮を荘厳なものにしてゆこうとするものであった。すなわち、「永遠の森（杜）」を造ろうとしたのであった。そのためには、自然林に近い状態をつくり上げ、永遠に維持存続させる必要があった。

なお、我が国では古代から、森に神が鎮まりたまうと考え、あるいはまた、森そのものが神社あるいは御神体として崇敬されてきた。また、元々は、「神社」の「社」と「杜」は同義語であった。今日でも、例えば、奈良県の大神神社、長野県の諏訪大社上社などは、山が御神体であるため本殿はなく拝殿のみで、古代の神社の形態を伝えている。

#### 主林木の決定 - 針葉樹か常緑広葉樹か

ところで、このような森を造るために何を主林木とするかが大きな課題であった。この点に関し、大隈重信内務大臣は、伊勢の神宮や日光の杉並木のような雄大で荘厳な景観が望ましく、藪のような雑木林は神社らしくないとして、スギやヒノキを主林木とするよう主張したが、本多博士ら専門家は、スギやヒノキは代々木の風土にあまり合わないこと、また、横を通る山手線が当時蒸気機関車であったことから煙害が予想されること、スギ・ヒノキは煤煙に対する抵抗力が広葉

樹よりはるかに弱いことからこの主張を退けた。そして、人の手を加えずに天然更新によって永く森を維持することができ、煙害に強く、また、神社にふさわしい森厳な樹形、林相をもつものという観点から、カシ、シイ、クスなどの常緑広葉樹を主林木とすることとした。

なお、東京の樹林という点、落葉広葉樹の多い武蔵野の雑木林が一見代表的であるが、これは歴史的には比較的新しく、鎌倉時代からまきや炭を生産するために人間によって造られたものとされ、本来の森林帯分布では関東平野は常緑広葉樹林帯に属している。

#### 長期的な林相の変化を予想した高度な植栽計画

計画では、カシ、シイ、クスなどの常緑広葉樹を主林木と決定したが、域内には御料地時代からの樹木があり、また、多種にのぼる献木（後述）を配置するため、ただちに全域をカシ、シイ、クスなどの常緑広葉樹にすることはできなかった。また、神社らしい当座の風致を造る必要もあった。そのため、林相、すなわち森の形態や様相を次のように4段階に分けて予想し、造営期間満了から年を追うごとに理想の林相に近づくような植栽計画を立てた上で、実際の植栽に着手した。

##### （第一次（当初）の林相）

明治神宮の森の創設時に主木とされたのは、御料地時代からのアカマツ、クロマツであった。そして、このアカマツ、クロマツよりもやや低い層としてヒノキ、

サワラ、スギ、モミなどの針葉樹を交え、さらに低い層に将来主林木になるカシ、シイ、クスなどの常緑広葉樹を配し、最も低いところに常緑小喬木と灌木を植栽した。

#### （第二次の林相）

創設当時の主木で、森の最上層をなすマツ類はかなりの成長が予想されるが、やがてヒノキ、サワラなどの旺盛な生育に圧倒されて、次第に衰退し、数十年後にはこれらがマツに代わって森の最上層を支配すると予想された。この段階では、マツ類はヒノキ、サワラ類の間に点々と散在する状態となる。

そして、その下の層のカシ、シイ、クスなどの常緑広葉樹が成長し、ヒノキ、サワラなどと成長を競うようになる。

#### （第三次の林相）

森の創設後百年内外でカシ、シイ、クス類が支配木となって全域を覆い、常緑広葉樹の森になる。その常緑広葉樹の中にスギ、ヒノキ、サワラ、モミ、クロマツといった針葉樹と、場所によってはケヤキ、ムク、イチヨウなどが混生する状態になる。

#### （第四次の林相）

第三次からさらに数十年から百余年経つと、針葉樹は消滅し、純然たるカシ、シイ、クス類に覆われた鬱蒼たる森になる。林内には自然に落下する種子から発生する多くの常緑樹の若木や小灌木が育ち、ここに至って永久に自然に森の更新（天然更新）が行われるようになる。

このように具体的な樹種の消長をもって林相の遷移を予想した植栽計画は、当時として驚嘆すべき先見性をもったものであったとされる。普通の公園では、一定の樹種を植えてその成長をみてゆくのであるが、見かけの上での樹種が多くても、植物のお互いどうしの関係は希薄である。また通常、林では、松林、杉林、クヌギ林といったように、優先種の樹木によってほとんど独占されてしまうので植物の間にあまり競争が起こらない。

これに対して、明治神宮の森は、樹種間の競争や世代交代を織り込み、長い時間をかけて自然の森をつくることを基本としたのである。明治神宮の森が人工の森の傑作といわれるのは、まさにこの長期的観点に立った植栽計画によるのである。

#### 落ち葉一枚も持ち出してはならない

また、造営時に森の管理についても計画され、特に落ち葉について、『明治神宮御境内林苑計画』の中の『管理計画』は、「林内に堆積した落葉を除去すると、地力の減退や自生する稚樹を抜き取ることになり、将来、森林の荒廃の恐れがある」としたが、この警告は森の誕生後現在に至るまで嘗々と守られており、林苑から落ち葉の一枚も持ち出してはならないとされているとのことである。参道や境内に落ちた葉もかき集められ森の中へ戻されているとのことである。こうして戻された落ち葉は、自然に分解して柔らかい栄養豊かな土壌を作り、森を育むのである。

このように、造営時にすでに長期的視

点に立って、森の管理にまで注意が払われていたのである。

## 全国からの献木

林苑造成に必要とされる多くの樹木は、全国からの献木によることとされた。しかし、献木はどんな樹木、樹種でもよいわけではなく、次のような条件に合わなければならなかった。

- (1) 境内にふさわしい自然の樹姿を備えているもの
- (2) 枝根の発達が十分で活着、成長の見込みが確実なもの
- (3) 樹種は主としてカシ帯、ブナ帯を郷土とし、健全な生育をして、将来、代々木・青山地方の気候、土性に適合し、完全な成長を遂げられるもの

これらの条件にかなった樹種として、喬木性を甲類として45種、灌木類を乙類として35種、合計80種が選定された。

また、外国産のもの、サクラ、ツバキ、サザンカ以外の華やかな花をつけるもの、果実のなるもの（採りに入る者がいるから）庭園木のような手入れされたものは除かれた。

全国の役所、学校、団体、個人などから献木の申し込みが殺到し、献木の総数は9万5559本にのぼった。この中には、東京市小学児童からの5270本の献木もあり、また、個人でサカキ、ヒサカキ併せて1万本もの献木をした篤志家もいた一方、乏しい年金をすべて献木のために使い、十数本の松を献上した人もいたとのことである。

献木は、三百数十種にのぼり、わが国の樹林に存在するほとんどの樹木を網羅していたほどといわれるが、特に多かったのは、マツ、ヒノキ、サワラ、カシ、シイ、クス、イヌツゲ、サカキなどであった。

## 森の誕生

大正4年（1915年）10月に地鎮祭が行われ、造営工事が開始された。また、林苑の植栽は大正5年から始められた。大正9年（1920年）林苑内の植栽がほぼ終了、参道も完成し、11月1日に鎮座祭が行われた。鎮座祭当日は非常な人出で、品川辺りから明治神宮まで道路は人で埋まり、身動きもならない状態だったという。こうして、明治神宮の森、東京の新しい鎮守の森が誕生したのである。

なお、造営時の立木数は、献木を含め、12万2572本と記録されており、うち一番多く植えられたのはイヌツゲで約2万2千本。次いでクロマツが約1万2千本。将来の主林木となるクス、カシ類、スダジイは、それぞれ約9千本、7千本、2千5百本であった。そのほか、サカキが約8千本、ヒサカキ、ヒノキがそれぞれ約6千本などであった。

竣工から約80年経った現在、明治神宮の森は順調に成長し、予定よりも少し早くすでに第三次の林相となっている。これは、マツクイムシの被害により予想よりも早くマツ類が枯死したため、カシ、シイ、クス類がすでに支配木になったことによる。

## 三大美談

なお、明治神宮の造営については三大美談とされるものがある。

その1は、延べ10万余人にのぼる全国青年団員の勤労奉仕である。これは、造営事業中に第一次世界大戦が起こり、物価が高騰し、工事従事者の賃金の支払いに支障が生じたため、青年団が奉仕することとなったものである。

その2は、上述の全国からの約10万本の献木である。

その3は、外苑の奉獻である。明治神宮が国費で造営されたのに対して、神宮外苑は、明治天皇、昭憲皇太后の御遺徳を永く後世に伝えるために、旧青山連兵場跡地を民間有志による明治神宮奉賛会が国民の寄付により造成し、大正15年(1926年)に完成した後、聖徳記念絵画館をはじめとする建物、施設全部を明治神宮の外苑として奉獻したものである。

青山通りから北へ伸びる神宮外苑の4列の銀杏並木は欧州の都市デザインの手法に則っていて、今日東京で最も美しい並木道といわれている。また、内苑と外苑を連絡するために明治神宮内外苑連絡道路が建設されたが、この連絡道路は、道路と公園を一体化した我が国初の本格的な公園道路(パークウェイ)であった。神宮外苑の造成は、明治時代に日比谷公園が建設されて以来みるべきものがなかった東京の近代的造園の歴史の中で特筆されるべきものであり、都市計画的な価値も高い。

## 他の神社における大規模植林

なお、戦前、明治神宮以外の日本を代表する神社でも大規模な植林を行ったところがあり、そのような例として、伊勢の神宮(なお、「伊勢神宮」というのは俗称で、単に「神宮」と呼ぶか、特に他の「神宮」と区別する必要がある場合には「伊勢の神宮」と呼ぶのが正しい)と橿原神宮の場合を挙げることができる。

伊勢の神宮の場合は、社殿などを20年毎に造り替える遷宮に必要な用材の確保のほか、風致の維持、水源涵養のために、大正13年(西暦1924年)から伐期200年計画で神路山(かみじやま)、島路山(しまじやま)の第二宮域林といわれる約4,400ヘクタールの区域(第一宮域林を合わせると宮域林全体の面積は約5,500ヘクタール)でヒノキの植樹が計画的に実施されている。

橿原神宮は奈良県橿原市にあり、第一代の天皇であり我が国建国の始祖とされた神武天皇と、媛蹈鞰五十鈴媛(ひめたたらいすずひめ)皇后を御祭神とし、明治23年(西暦1890年)に創建された。昭和15年は御鎮座から50年、かつ、神武天皇即位後2600年に当たることから国を挙げての奉祝記念事業が行われ、その一環として境域の拡張と外苑の建設が行われ、全国からの2万2000余本の献木を含む約7万6000本の樹木が植栽された。樹種については、神社境内の樹林は郷土の木を持って構成することとし、橿原の地名からみて往古はカシが生い茂っ

ていたと推測されることからカシ類を主とし、昔の姿に還元することを目指した。

建設作業は、明治神宮の造営に習い、勤労奉仕で行われ、何と延べ 121 万 4 0 0 0 余人が建設に参加したという。

ただし、伊勢の神宮も橿原神宮も明治神宮のように東京のような大都市のど真ん中に存在する「大都市の森」ではなく、また、伊勢の神宮の第二宮域林の植林はヒノキ林の育成であり、橿原神宮の場合は古事記、日本書紀の記述に相応するカシ類を中心とする植樹であり歴史を踏まえたものであるが、明治神宮の森のように長期にわたる林相の遷移を踏まえた植栽計画に基づくものとは異なるといえよう。

おわりに

以上みてきたように、明治神宮の森は、「大都市の森」として特筆すべき価値をもつ文化遺産といえる。この点に関し、明治神宮の森づくりに計画時から関与し、実質的な造成担当者として多大の貢献をされた上原敬二氏は次のように述べておられる。

「二度と作り出すことのできない至宝の樹林を、子孫のためにこれ以下の状態で残すことは恥じなければならない。国民の精神教育、学術上の観点、あらゆる点からいって崇敬者は言うまでもなく、一般大衆はこの森を永遠に、完全に守るべき重責を負わされているはず。後世のためにこの責務を果たしうよう、神前に誓うべき心境をもつべきではあるまい

か」(上原敬二著『人のつくった森 - 明治神宮の森造成の記録』)

参考文献

本稿は、明治神宮社務所編(中井澤秀明著)『「明治神宮の森」の秘密』小学館文庫、平成 11 年、及び松井光瑤、内田方彬、谷本丈夫、北村昌美共著『大都会に造られた森 - 明治神宮の森に学ぶ』第一プランニングセンター、平成 4 年、に多くを負っているが、その他の参考文献は以下のとおりである。

代々木の杜 8 0 フォーラム運営委員会発行・編集『神々と森と人のいとなみを考える 森の巻』平成 13 年

明治神宮奉賛会『明治神宮御造営ノ由来』昭和 5 年

上田篤『鎮守の森の物語 もうひとつの都市の緑』思文閣出版、平成 1 5 年

越沢明『東京都市計画物語』日本経済評論社、平成 3 年

安津素彦・梅田義彦監修『神道辞典』神社新報社、昭和 43 年

橿原神宮庁発行『橿原神宮』平成 1 0 年